

東京大学史史料室ニュース

第29号 2002・11・30

中野 実氏追悼号



史料室にて（2000年4月）

哀 悼

東京大学史史料室の専任室員・教育学研究科助教授の中野実先生が、2002年3月30日に逝去されました。享年50歳、謹んで哀悼の意をお捧げいたします。

先生は、本学をはじめとする全国の国・公・私立大学の歴史的資料に精通されるとともに史料の収集・管理にも多大なエネルギーを注がれ、全国各地の大学史編纂に携わる研究者にとりまして、またもちろん東京大学史史料室に関係したメンバー全員にとりまして、かけがえのない存在でいらっしゃいました。

史料室のセンター化推進を始めとする様々な業務と、全国の大学史研究の活性化に意欲を燃やしていらっしゃった先生が逝去されたことは誠に残念の極みであります。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

ここに追悼号を刊行し、先生をお偲びいたしたいと思っております。

中野実さんの思い出

高橋 進

中野さんが逝去されたのが初春でした。中野さんのご病気が急変したという報せを受け、急遽病院に駆けつけましたが、その報せを聞いたときに仕事でいた小石川植物園の桜がいまでも目に焼き付いています。

中野さんの逝去は、かえすがえす残念でなりません。史料室に電話をしますと、必ず「ハイ、中野です」とでてくれました。中野さんと知り合ったのは私が史料室に関係してからですので、10年以上たつと思います。中野さんは、史料室でまず助手として東大100年史の編纂に携われ、1993年からは、助手として、また1999年からは助教授として、獅子奮迅の働きをしてくれました。特に、『学徒動員』の執筆と編集、また東大125周年の際の写真入りの年表の作成など常に史料室の先頭にたって、努力してくださいました。そればかりでなく、史料室にくる多くの質問に対しても、常にそれを克明に調査し適切な返答をなさってくれました。どのような質問があったのと聞きますと、してやったりという顔で説明してくれた中野さんの顔が忘れられません。

中野さんとはいろいろな形でおつきあいをしました。春夏秋冬、史料室での様々な慰労会、いつかは冬の西の市につれていって来て、いろいろと由来を説明してくれました。史料室がここまで活発に仕事をこなしたのは、ひとえに中野さんの力であったと思っています。

中野さんの努力を無にしないよう、今後史料室を発展させていくことが、史料室関係者の責務だと思っています。

中野さんともう二度とお花見にいけないのが、残念でなりません。

(法学政治学研究科教授・東京大学史史料室長)



広報室の方々と

中野実氏の足跡

略歴

- 1951年9月5日 東京都に生れる
小学校時代、父親の仕事のため、一時、ブラジルへ
東京都立府中高等学校を経て、
- 1974年3月31日 立教大学文学部心理学科卒業
- 1974年4月1日 東京都立大学部外者研究者（～1975年3月31日まで）
- 1975年4月1日 立教大学大学院文学研究科教育学専攻修士課程入学
- 1977年3月31日 立教大学大学院文学研究科教育学専攻博士課程前期課程 修了
- 1977年4月1日 立教大学大学院聴講生
- 1978年4月1日 立教大学大学院文学研究科教育学専攻博士課程後期課程入学
- 1981年3月31日 同上 単位取得退学

職歴

- 1978年4月1日 東京大学百年史編集室室員（非常勤）（～1981年3月31日まで）
- 1981年4月1日 東京大学助手（教育学部）に採用（文部事務官併任）、東京大学百年史編集室勤務
- 1985年4月1日 広島大学大学教育研究センター客員研究員（～1989年3月31日まで）
- 1987年4月21日（勤務先変更）東京大学史料室
- 1988年4月30日 東京大学助手退職
- 1988年5月1日 立教大学図書館大学史資料室（常勤嘱託）（～1993年3月31日まで）
- 1993年4月1日 立教学院史編纂室（常勤嘱託）（～1993年10月31日まで）
- 1993年11月1日 東京大学助手（教育学部）に採用（文部事務官併任）、東京大学史料室勤務
- 1999年11月1日 東京大学助教授（大学院教育学研究科）に昇任
- 2000年10月1日 財団法人野間教育研究所兼任所員を委嘱される

そのほか、立教大学、昭和薬科大学、国際基督教大学、青山学院大学、お茶の水女子大学等の非常勤講師を歴任

主要著作

●著書・編書

- 『東京大学物語 - まだ君が若かったころ -』
（吉川弘文館、1999年）
- 『大学史をつくる - 沿革史編纂必携 -』
（共編著、東信堂、1999年）
- 『東京大学百年史』通史一～三
（東京大学百年史編集室編、1984年～1986年）

『東京大学百年史』資料一～三

（東京大学百年史編集室編、1984年～1986年）

『東京大学の学徒動員・学徒出陣』

（東京大学史史料室編、1997年）

『年譜 東京大学1887・1977・1997』

（東京大学史史料室編、1997年）

A History -21 Short Stories in Pictures- The University of Tokyo 1877-2000（東京大学史史料室編、2000年）

『全国大学史資料協議会東日本部会の十年の歩み』

（全国大学史資料協議会東日本部会編、1999年）

『立教学院百二十五年史』資料編第一～三巻

（立教学院、共編著、1996年～1999年）

●論文

「大正期における大学改革研究試論」

（『大学史研究』第1号、1979年）

「東京大学百年史の編纂過程とその問題点」

（『東洋大学史紀要』第6号、1988年）

「戦時下の私立学校—財団法人立教学院寄附行為の変更を中心にして—」

（立教大学教育学科研究年報』第39号、1996年）

「帝国大学体制の成立とその改編の動向」

（寺崎昌男・編集委員会共編『近代日本における知の配分と国民統合』第一法規、1993年）

「帝国大学体制形成に関する史的研究—初代総長渡辺洪基時代を中心にして」

（『東京大学史紀要』第15号、1997年）

「帝国大学体制成立前史—第一期東京大学末期の状況」

（『東京大学史紀要』第16号、1998年）

「帝国大学創設期に関する史料と文相森有礼—『帝国大学体制』の形成に関する試論的考察—」

（『教育学研究』第66巻第2号、1999年）

「帝国大学体制形成期における学位制度の成立に関する考察」

（『東京大学史紀要』第17号、1999年）

「帝国大学体制成立前史（2）—大学分校を中心にして」

（『東京大学史紀要』第18号、2000年）

●史料復刻・翻刻など

『東京大学年報』第一～六巻

（東京大学史史料研究会編、1993～1994年）

『編集復刻 日本近代教育史料大系 太政類典』

（日本近代教育史料研究会編、龍溪書舎、1994年）

『東京大学歴代総長式辞告辞集』

（東京大学創立120周年記念刊行会編、1997年）

『編集復刻 日本近代教育史料大系 公文録』

（日本近代教育史料研究会編、龍溪書舎、2001年）

中野実助教授を悼む

寺崎 昌男

逝去から8ヶ月を越える。そのこと自体が信じられない。

「中野さん、あれはどうなっていたかな。資料はあるかなあ」などと質問の電話をかけそうになる。「大学史をやっている大学院生がいるけど、一度史料室を訪ねさせてくれない？」などと頼みたくなる。他大学の資料室・文書館などのスタッフの方々はもちろん、教員、職員、大学院生などの皆さん、さらには世話になったマスコミ関係の諸兄姉など、同じ思いをなさっているのではないか。

さまざまな方面からの頼みに、おおらかに、親切に、そして確実に答えてくれる人だった。国立大学の人であろうと私学の人であろうと、研究者であろうと職員であろうと、市民であろうと院生であろうと、分け隔てをしなかった。そして何よりも、東京大学内の史料のことを、掌を指すように知っていた。

東京大学は優秀なアーキビストを失った。日本の大学史研究の世界は、先駆的研究者の一人を見送った。4月3日の告別式後、葬儀場から先発する霊柩車を見送ったときの虚脱感から、まだ抜けきっていない。

*

*

中野氏が東京大学と公的な関係を持ったのは、教務職員という待遇で百年史編集室の非常勤室員の一人になった1978年である。そのころわたくしは立教大学文学部から学外専門委員で来ていて、立教のドクターコースの院生・中野実君を紹介したのだった。

その3年後の1981（昭和56）年には唯一のポストだった編集室専任助手に就任し、2年後の1983年からは、4年度にわたって例年2巻ないし3巻に及ぶ『東京大学百年史』（全10巻）の刊行が始まる。百年史編纂がまさに山頂近い最後の急坂を駆けのぼる時期に、実務責任の中心に座らされたのが、中野氏だった。

東大の卒業者でも、助手や講師に任命される時は、みな緊張する。立教大学の院生からいきなり専任助手になった時の中野氏は、気の毒なほど緊張しきっていた。

のちに書いている。

「昭和56年の春、30歳の一步手前であった。端的に五里霧中。羅針盤もないままに大海に漕ぎ出るような不安な気持ちであった。案の定、その年の夏に、十二指腸潰瘍になったが、医者

からは“人並みの神経”を持っていたのか、と揶揄された。・・昭和56年という年は、公私両面においてわたしの軌跡上の画期であった。」

（中野「編集室の三つの委員会について」

『東京大学史紀要』第6号、1987年3月）

潰瘍になっていたことを、委員長たる私も知らなかった。そういうことをグズグズ訴えるタイプの人ではなかった。10数人の、先輩研究者・大学院生、事務職、そして教官たちからなる編集室の中心にいることは、大変な重圧だったに違いない。

だが中野氏は、焦りを見せず、明るさを失わず、筋を通しながら乗り切ってくれた。わたくしも東京大学を退任するときに書いたことがある。

「〔編集委員長期に〕最も頼りがいあるパートナーとなってくれたのは、中野実氏である。立教のころから、大学史をやろうという一念で大学院での研究に打ち込んでいた彼は、1981年春から酒井豊氏のあとを継いで専任助手となり、痛ましいほど緊張しながら、ついに全巻完成までの中軸になってくれた。彼の献身と人間的器量がなければ、完成は大幅に遅れていただろう。わたくしがあの仕事に巻き込まれるのは、教育学部教育史の専任教授になった手前、また大学史の研究に踏み込んできた手前、しかたのないことだった。だが出身大学もちがう中野氏が、あれほど精力を割く義理はなかった。しかし、彼はやりあげてくれた」

（拙稿「東京大学における13年半を顧みる」

『東京大学教育学部教育哲学・教育史研究室紀要』第18号、1992年6月）

亡き土田直鎮委員長・稲垣栄三副委員長に特に愛され、今も元気な伊藤隆・益田宗副委員長からは学問的にも人間的にも大きな刺激を受けたようである。ここに名前を書ききれないが、立教大学時代からの友人たち、東大編集室に来てからの国史学や教育史学の院生の友人たちにも愛され、論争の相手にもされ、ときには原稿の催促役にもなりながら、大冊の完成に献身してくれた。深夜の酒をよく一緒に飲んだ。絡まれもした。校訂作業が深夜に及んで、閉まってしまった赤門の脇の柵を一緒に乗り越えて帰ったこともある。東大勤務時代の忘れられない幾つかのシーンを、氏とともに持つことができた。

ちなみに、職員の人たちとあれほど隔意なくつきあうことのできた教官も少ないのではあるまいか。葬儀を多くの職員の方達が手伝われ、また旧職員の方達も悲しみをこめて参列されていた。あらためて胸を衝かれた。

もともと中野氏には、人を分け隔てするという感覚自体がなかった。権威主義を心から嫌っていた。疑うべくもない美德である。しかし同時にそのこと

は、氏の仕事の上でかけがえのない力になっていたと思われるのである。

* * *

話は突然飛ぶが、京都大学は一昨年専任教官を持つ「京都大学大学文書館」を立ち上げた。東北大学は沿革記念資料館を大学史史料館に改称し、人的にも整備した。その他、九州大学、名古屋大学などにも史料館創設の動きがあると聞く。もちろん私学でもサバイバルと改革を睨んで、史料館や研究センターの設置が、このところ急速に進んでいる。

こうした動きをキャッチした『日本経済新聞』は今年2002年の7月6日の文化面で、大学史研究と大学アーカイブズ建設の進展について大きな特集記事を組んだ。中野氏の逝去3ヶ月後のことである。

「生きていたら必ず登場しただろう。どんなに喜んだことか」。

新しい悲しみに誘われた。思えば編集室助手時代、世界の大学アーカイブズ調査をやったとき中心になったのは、中野氏と、今は国際資料研究所を主宰して文書館問題の専門家として活躍している小川千代子さんとの二人だった。調査をもとに、国立大学にアーカイブズを整備せよという、恐らく日本最初の提言を含む報告書ができたのだった。

亡くなる3年前に、中野氏が助教授に昇進していたのは、せめてもの、しかし大きな慰めであった。東京大学の英断を称えたい。しかしそれだけに、今後の賢明な措置が心から待たれる。

資料保存と収集・整理・公開の施設は、21世紀の日本の大学必置の文化施設である。東大にしてみれば、法人化を含む近い将来に、最も求められる施設である。すなわち大学のアイデンティティの確認・普及と広報活動との心臓に当たる。

酔うと「先生、私は日本で初めての大学アーキビストになります」と叫んだこともあった中野氏。今元気だったら、どんなに張り切っていただろう。彼なら立派に東京大学史史料室の存在理由を示し、文書館に発展させ、国・公・私をつなぐアーカイブズ組織を盛り立てていったろう。

* * *

最初の史料室開設と整備の苦勞、2度目の東大時代の数々の業績や貢献など、功績の詳細は別に書く方もあろう。百年史のころの思い出は、幾度書いても尽きそうにない。

(東京大学名誉教授・元東京大学百年史編集委員会委員長・史料室長、現職・桜美林大学大学院教授)

中野実さんの思い出

三谷 博

中野実さんが昨春、亡くなった。一昨年夏、最後にお目にかかったおり、手術をなさったと伺い、かなり体力を消耗されているように見受けたのであるが、その後、とくに悪化したとの噂は聞かなかった。愚かにも、回復されているのではと楽観していただけに、ショックであった。我々は文字通り、かけがえのない人を失ってしまった。

中野さんは、かつて『東京大学百年史』が編纂されたとき、アルバイトでご一緒した同世代である。大学院で学びつつ、百年史のための史料収集や整理に当り、原稿の一部も執筆した。この編纂事業の開始に当たっては、当初、編集方針にかなりの意見の不一致があったが、史料編纂所の土田直鎮先生、および文学部の伊藤隆先生と教育学部に着任された寺崎昌男先生とが再組織されると、うまく仕事が回転し始めた。中野さんは、このとき、寺崎先生が立教大学から連れていらっしやった大学院生数人の一人だったように記憶する。私といえば、院生の分際で、明治前半期の編別構成に一家言をずけずけ述べていた。先生方は無論、同輩の諸氏にも、随分、煙たい存在だったのではなからうか。いま思うと汗顔の思いがする。

私はその後、半年あまり国史学科の助手を勤めた後、学習院短大の専任講師に就職したので、実際の編集作業にタッチしていない。通史編の執筆が始まったとき、卒業生の動向に関する制度と統計の分析をし、寄稿しただけである。これに対し、中野さんは、編集・制作の段階にはいると、文字通りの中心人物となった。当時の編集室には、彼のように立教や慶応などの「外部」の院生と、文学部や教育学部など「内部」の院生とが、沢山出入りしていたが、この混成部隊は、いつも温顔を絶やさぬ土田室長のもと、先輩の酒井さんや事務の弥永さんを核にして、次第により関係を創りだしていった。その際には、編集室のあった安田講堂で休み時間に卓球に熱中したり、夕方に飲みに行ったりという遊び心が、少なからぬ役割を果たしたようである。そのリーダーは他ならぬ中野さんと、同じ都会っ子の照沼康孝さん(現、文部省)だったのではなからうか。この大規模な組織がちゃんと機能するためには「よく学び、よく遊ぶ」ことが不可欠だったのであり、今から振り返ると、先生方の炯眼と、自ずから生じたこの二人のリーダーシップに敬服せざるを得ない。

中野さんは、通史編の後、部局編の制作が始まってからは、実務の面でも文字通りの中心となって奮

闘した。そのクライマックスは、校正のため長野県に出張して何日も印刷所に寝起きしたことと聞いたが、それは照沼さんが詳しく書いてくださるだろう。ともかく、本を実際に作る過程で、彼の働きは抜群で、のちに編集室、そして史料室の助手、ついで助教授に採用されたのは、衆目の見るところ、当然の人事であった。

私は、1980年代末に教養学部に着任した後、昔の縁で史料保存委員会の末席に連なったが、大学史から遠ざかって久しく、あまりお手伝いはできなかった。ただ、勤務先で『駒場50年史』を刊行するという仕事を仰せつかったときには、はなはだ勝手ではあるが、逆に大変にお世話になった。企画から2001年末という刊行期限まで時間がなく、史料の所在調査や整理といった正規の手続きが取れないため、窮余の一策で、当事者の主観の記録という形をとったが、それでも一通りの調査は必要である。恥ずかしい話だが、教養学部に通っていても、どこにどんな史料があるか分からない。そこで、まずは中野さんを訪ねて、駒場の史料の残存・保管状況を伺うことから始めたのである。こういう時の中野さんは、実に親切で、うれしそうな顔をする。史料室を訪ねた皆が経験したことだろうが、あの大きな目をゆっくり見開き、輝かせて、丁寧に説明してくれる。彼はアルバイト時代から、研究者だけでなく、事務官の人たちとも親しい関係を作っていた。そこで、事務の人たちが部局を経巡ると、そのネットワークが広がってゆき、それにつれて中野さんのもとに東大全体の史料の所在知識が蓄積されてゆく。「駒場のこれこれ関係の資料はあそこにありますよ。いつか、知り合いの方が教えてくれたので、一緒に見えました」という調子である。駒場史の編集の適当な時期が来たら、一度、一緒に回って、確認しておきましょうと、約束した。

しかし、その約束は果たされないで終わった。具合が悪そうだと噂は聞いていたが、大したことはなかろうとたかをくくり、一日延ばしにしていたのである。その間、彼がどんな苦闘をしていたのか、まったく知らなかった。そのため、彼には大変申し訳ないことをする仕儀となった。駒場50年史に使う写真を、学生のアルバム委員会から借用することになり、彼に紹介を頼んだのだが、その待ち合わせに20分も遅刻したのである。7月の猛暑の日で、あたふた生協の書籍部のある旧学生部の建物に駆けつけると、内部の壁に中野さんが弱々しく寄りかかっている。ただでも頭がぼうっとするほどの日のことであつた。やせ衰えた姿にはっとすると同時に、こんな状態を押して約束を守ってくれた彼を待たせてしまったことに、うろたえてしまった。中野さんは、

しかし、何事もなかったかのように、2階のアルバム委員会に連れて行ってくれた。学生との交渉は面倒かもと心配していたが、彼が手慣れた様子で、適切な助言をしてくれたおかげで、我々は良い写真が使えることになったのである。

中野さんはいつもこうだった。人からいやなことをされても、被害を被っても、淡々と受け流し、むしろ親切に対処する。そこには、何の不自然さもない。私などは、その良くできた大人に甘えきっていたのである。

中野さんは、2000年3月に催された助教授昇任のお祝い会で、仕事は順調に進みつつあるが、そろそろ後継者の養成に乗り出さねばと、発言していた。なるほど、そこまで、もう考えているのか、我々ももうそんな歳なんだと感心しながら聞いていたが、彼はそれを実行に移す前に、突然いなくなってしまったのである。彼のあの膨大な、かけがえのない蓄積は、むしろこれから生かされるはずだった。真の実りの時を失った彼はどんなに無念だったろう。同時に、残された我々東大史関係者は、唯一無二の頼りを失って、呆然としている。彼とともに、我々はすべてを失ったかのようなのである。人の価値は棺を覆うて初めて定まるといふが、中野さんの場合、その存在がいかに大きかったか、いま痛切に思い知らされているのである。

中野さん。50年史は何とかできました。ありがとうございます。また、あの暑い夏の日、ひどいことをしました。ご免なさい。生前に、お礼とお詫びとを一言でも伝えておきたかった。あの優しく、温かい笑顔を思い出し、春秋に富むはずの人生が突如断たれた事実を思い返すと、この悔恨と痛覚はいやますように思われる。中野さん。安らかに眠ってください。

(総合文化研究科教授・東京大学史料の保存に関する委員会委員)



『東京大学百年史』編集時

中野さんのこと

土方 苑子

同じ研究分野（日本教育史）なのでお名前はかねてから存じ上げていながら、私が中野さんとおつきあいさせていただいたのは1995年に東京大学に移ってきてからである。大学唯一の日本教育史の仲間として以後の私には本当に心強い存在であった。その後数年にわたり「東京大学史料の保存に関する委員会」の委員をやらせていただいたのでその関係もあり、また日本教育史を専攻する大学院生が大変お世話になったので、その関係でもお話をする機会がたびたびあった。いつも明るく冗談が絶えないので私も調子に乗ってしまいお話しするのはとても楽しかったが、時折それに留まらない様々な面をかいま見ることがあった。

中野さんに一番お世話になったのは1998年『東京大学大学院教育学研究科・教育学部創立50周年記念誌』の編集に際してであった。『東京大学120年誌』の刊行を終わられたところであり、そのノウ・ハウを全面的に提供していただいて『50周年記念誌』は刊行することができた。50周年に記念誌を発行すること、そして私がその担当になることが決まったのは、50周年記念式典の決定と同じ頃であり、1年余しかなかったのである。中野さんのご指導がなければとうてい間に合わせることはできなかったと思う。編集方針としては、写真をたくさん取り入れて「今」の教育学部の様子がわかるもの、そして肝心なことはきちんと記録しているもの、ということとした。教育学部では1995年に大学院重点化をおこなっており、この時それまでの学部のあり方の総括がおこなわれていた。また長く勤められた先生方が数年のうちに次々と退職された直後で、その先生方からお話を伺うことも編集と並行して行われた。ここ数年のどういう総括に基づいて大学院重点化がおこなわれ、「今」の教育学部に至ったのか、それがわかるような『50周年記念誌』にしようとしたのである。

全面的にバックアップしていただいて大いに感謝しつつも、これは用心！と思ったのは、中野さんは教育学部にある「史料」を安田講堂の地下に移すことにものすごくどん欲だったことだ。教育学部には30年誌を編纂したときの資料や、先生方が置かれてきたさまざまな文書が段ボールなどにはいつて積まれていた。とにかく全部を時計台地下で保存するという彼とまだ手元に置きたい私とで時々綱引きがおこなわれた。ちょっと動揺して「いいかな」などと言ってしまったあとは、「寄贈ですか？ 委託で

すか？」などとたたみかけられ、たちまち中野さんを先頭に史料室の一団が現れあつという間にもっていかれた。その早いこと、手際のいいこと。あとで取り返したいと思ったこともあったが、安田講堂の地下に積まれた段ボールの山をみるとあまりの力仕事であきらめざるを得なかった。といっても今大変貴重な資料を取り合ったわけではない。多くの方にはゴミにしかみえないかもしれないが、そのなかに後になっていくらかの手がかりが見つかるかもしれない、こんな程度でも中野さんは引き取りたがったのである。そこには多分壮大な中野さんの大学史史料室の構想があるのだと私には感じられた。専任は一人だけ、地位も位置づけも不安の残る場にあり、将来実現する保証はないのに、あきらめて仕事を適当な範囲に止めることなく、あるべき史料室の実現に向けて必死で歩んでおられたのだと思う。そんなこともあって私はかなりの史料を移すのに同意した。そして、綱引きをやった以上残ったものも放っておけないことになり、その後目録を作り続け、今もまだ50年誌編集から継続しているものがある。中野さんがいなくなってみると、一番報告したい人を失ったということが改めて実感される。

思うに中野さんの考えていた大学史史料室は、各学部・大学院・研究所など当局が作成した文書を初め、教授会、委員会、学生、院生の自治会などの文書をとにかく集めることから始まるようであった。なぜなら大学では各層で大量の文書史料が絶え間なく生み出されており、どれが役に立つか、将来何が必要かなど、まだわからないと言える。そのなかで最大限の可能性をまず追求したい、と言うことだったのではないかと思う。百年史編纂を経て、次の百五十年史が絶えず念頭にあったということでもあっただろう。こうして一方で教育学部のみならず各局をまわって文書を集め、他方でまた『東京大学物語』の執筆、定期刊行物である『東京大学史紀要』『東京大学史史料室ニュース』を編集刊行し、大部の『東京大学の学徒動員・学徒出陣』を刊行された。「東京大学史料の保存に関する委員会」の会合では、まだほかに様々な実行中、計画中の仕事が報告されていたように思う。さらに毎日数多くの外部からの問合にも回答されていた。こういうなかで大学の史料室、大学アーカイブの確立に向けて具体的な積み重ねが進行していたのだと思う。また、これらの仕事のなかでこそ、おそらく研究者としての中野さんの研究上の確信も確実に育っておられたと思う。本格的な研究が出され始めていて、凄い研究書が出るだろうな、と思われる状態のなかで中野さんは逝ってしまわれた。本当に惜しみて余りある急逝だったと、私も悔しく思う。

中野さんのこと

青柳 正規

私のコースの院生が何人か中野さんにアルバイトに使っていただいたり、また共通の研究者の友人もあった。中野さんと身近に接している若い人から、中野さんは史料室の仕事のなかで、本当に研究をしたがっている、と聞くことがあった。確かに中野さんにもっと時間があって研究を自由にさせてあげられたらどんなによかったかと思う。しかし同じくらい強く、中野さんは史料室の仕事のなかでこそ生き生きしておられたのではないかと思う。若い人を何人か動かしながら、自分の企画した大学史料の仕事をする、これはやはり中野さんの仕事だった。その中で若い人たちは学び、中野さんもこの院生にはこういうことをさせたらどうかと色々配慮を示してくださいました。私の知っている若い研究者とのつながりはほんの一部であり、中野さんは全国の大学アーカイブを立ち上げつつある仲間とつながり、大学史研究者ともつながって、それらのなかでも重要な位置にあった。それは第一線のアーキビストにして研究者という難しい道を切りひらきつつあることが認められての、信頼と期待であったと思う。

中野さんが築いてきた大学史史料室の仕事を引き継げる人がいるのだろうか、中野さんを知る人でそう思う人は少なくないだろう。さらに数人の専任スタッフがいて、少しは休むことができたなら、中野さんも走り続けなくてすんだかもしれない。大学全体で史料室の仕事が位置づけられ史料室への認識が高まれば、歩き回って文書を集める苦労が少しは減り、また雨漏りや、地下の湿気で史料が痛む心配をしなくてすんだであろう。これらのことを一身に背負って頑張ってこられた中野さんを継ぐというのはやはり大変な事だと思う。今改めてお仕事を思い返していると、史料室をちゃんとしてくださいよ、とあのギョロツとした目でいわれているように思えてくる。私に中野さんの意味が本当にわかるのは、これからかもしれない。そしてそのたびに、たくさんの聞き残したこと、話し残したことがあったと気づかされるような気がしている。

(教育学研究科教授・東京大学史料の保存に関する委員会委員)

中野さんと親しくさせていただくようになったのは、昭和63年の秋と記憶している。現在の東京大学総合研究博物館、当時の総合研究資料館で開館以来はじめての特別企画展を開催しようとしたのがそのきっかけだった。本郷キャンパス全体を建築博物館に見立てた「東京大学キャンパス展」である。キャンパス全体の建物の老朽化が進み、狭隘な研究室や教室が教育研究に深刻な影響をおよぼしつつあるなかで、いまいちど本郷キャンパスを点検しておこうという目的だった。

資料館の赤澤さん、建築史専攻の藤井さんと準備を進める過程で、東京大学の歴史を熟知する研究者の協力をおおがなければならないことが判明した。『東京大学百年史』を編纂した教育学部の寺崎さんに相談し、紹介されたのが中野さんである。当時、大学史史料室に席をおかれていた中野さんは、きわめて繁忙な日々を過ごされていた。大学改革の必要がマスメディアでもとりあげられるようになり、大学制度史の専門研究者として脚光をあびていたからである。そのようなお忙しい身であるにもかかわらず、中野さんは展覧会カタログの執筆などをこころよく引き受けてくださったばかりか、展覧会の構成に関しても深い学識にもとづくさまざまな提案を積極的に披露してくださいました。カタログ原稿を仕上げるためホテルに泊まりこみとなった際も、生き字引のような中野さんに尋ねさえすればたちどころに答えがかえってきた。一週間ほど起居をともし、ようやく校了となった夜、ホテルの一室で飲み明かした楽しい充実感に満ちた酒は、いまでも忘れることのできない思い出となっている。

展覧会を契機として遠慮のないおつき合いをさせていただけるようになったことは、大学に身をおく人間にとって大きな恩恵であった。さまざまな分野からおしよせてくる大学改革の要求のなかには理不尽なものも少なくなかった。直感的に理不尽とはわかっていても、筋道をたててその理不尽さを解きあかすことはなかなかむずかしい。そのような場合、中野さんに相談すると、歴史的なコンテクストや内外の大学制度を参照しながら的確な筋道を示された。短絡気味の意見や疑問に対しても辛抱強く耳を傾け、こちらの言葉が枯渇すると、やおらご自身の考えを開陳されるのである。柔らかな言葉と整然とした組み立てのために、いつの間にか中野さんの考えに同化していく自分に気づかされたのは一度や二度ではない。

畏友中野実のこと

新谷 恭明

大学に関することだけが話題となったわけではない。奥さまが経営している児童書専門書店の話題になると相好をくずして長話となることがしばしばだった。目録を開きながらいかにすぐれた選書であるかを滔々と話され、辟易とすることもなかったわけではない。

さまざまな相談をもちかけ助けていただいたにもかかわらず、中野さんがもちかける相談は大学史料室の整備充実に関する事柄だけであった。安田講堂の塔屋部分にある史料室は資料をつめた段ボールの箱がところせましと積みあげてあった。強い雨の日には雨水が流れこみ、段ボールを濡らす危険もあった。より安全な広いスペースというしごくもっともな相談に当時応えてあげられなかったことをいまでも残念に思っている。例外は中野さんの処遇に関することである。史料室の教官ポストには任期が定められていたので、一時恩師の寺崎さんのはからいで立教大学に転じておられたときがある。立教大学でも大学史の編纂という中野さんの専門を生かしたポストであったが、東京大学についてあれだけの学識と愛着をもっている方をみすみす見逃すことはないと思う。多くの方々が考えていた。その方々とともに中野さんと呼び戻すことができたとき、大きな満足感にひたったことをつい先ほどのできごとのように覚えている。史料室の充実発展のもっとも重要な要件が確保されたと考えたからである。

ひとの意見を聞くことの上手な、そしてご自身の意見を述べることについては大変に慎重だった中野さんは、現在進行中の独立行政法人化の流れに関してどのようなご意見をおもちなのだろうか。ぜひうかがってみたいと思うが、中野さんが教えてくれた思考の筋道の立て方にそって考えれば自ずと答えは出てくるような気がする。大学を愛し、大学の役割と重要性を説いた中野さんのお仕事にこれからも助けていただかなければならない。そして、中野さんのあの柔和な笑顔を思いだすたびに、大学への愛着こそがすべての出発点ですよ、とあのおだやかで確信に満ちた声が聞こえてくるようである。どうかいつまでも東京大学を見守ってください。

(人文社会系研究科教授)

畏友中野実が無念の死を迎えてからもう半年以上が経った。時間は悲しみを忘れさせてくれるものだと人は言う。確かに彼が亡くなってしばらくの間は泣いてばかりいたが、日常の忙しさが泣く時間を奪っていった。しかし、悲しみは癒えていない。悲しみというものが実は簡単には癒えないのだということに僕は今実感している。

そんな僕に中野実の追悼文を書けと言う。書かなければならないし、書きたいと思う自分がある。しかし、九州大学大学史料室の人間としての儀礼的な追悼文はどうしても書けそうにない。だから「東京大学史料室ニュース」というフォーマルな刊行物からの依頼に私情のみの文章でしか応えられないことをお許し願いたい。また、かつてこの史料室を担っていた故人を敬称抜きで書くという無礼をどうかお許しいただきたい。中野先生や中野氏や中野さんなどという言い方をしたことはなかったし、中野も僕に対してそうだった。それは僕と中野実との間にいわゆる「史料室」つながりというだけではない関係があって、その関係を僕はずっと意識してきたからなのだろう。僕たちは大学史だとか大学アーカイブだとかいう領域や世界を通じて交流を重ねてきたのだけれど、それだけで友人であったわけではない。出発点はお互いに異なった夢をまさに夢見ていたところからのつきあいであったからである。

僕と中野実が立教大学に入学したのは1970年、ちょうど「大学紛争」というものに一区切りがついた年であった。あの赤軍派の日航機ハイジャックが耳目を集めているさなか僕たちは大学に入学し、そして知り合った。

僕は教育学科であったが、中野実は心理学科の学生であった。その後いくつかの曲折があって僕たちは似た領域で働くことになるが、厳密な意味で同級生であったことはない。ただ、「大学紛争」後の時代を同じキャンパスの中で共有する同級生ではあった。そのことは単にクラスで机をならべていた以上に僕たちそれぞれにおいて大きな意味を持っていたのだと思う。中野は大学入学後早々に心理学に見切りをつけたのか、ホンモノの教育学科の学生のような存在感を持つようになっていた。僕と中野実が同級生であったかと時として錯覚するのはそのことによるのだろう。僕たちはただ「時代」の同級生であったのだ。そしてそれは意味としては大きかった。

僕も中野も大学院に進み、立教では例外的にいわれる「アカデミズム」といわれる世界に入っていっ

た。そのことで学生時代の同志もどきたちから背徳者として指弾されたことがなかったわけではない。中野実はそれに弁明せず、僕は弁明を重ねて、それぞれ痛い思いを引きずりつつ「大学」や「教育」を研究対象とすることにのめり込んでいった。その後僕たちはほとんど「学生時代」のことについて語り合うことはなかったと思う。一度だけ東大の史料室を訪れて二人きりで雑談をしたときに大学というものを研究する彼の根っこの部分を訊いたことがある。どこかで研究に対する自らの姿勢が揺らぎかけていた僕は中野実が口にした四文字に救われ、今もその言葉が僕を支えている。

研究者としての僕たちの第一歩は京都大学で開催された教育史学会だった。僕たちはそれぞれ初めての学会発表をした。研究者として同級生であったというならばこのことかもしれない。彼は寺崎昌男教授の直弟子として大学史という分野で存在感を示してくれ、僕は少なからず寺崎教授の寵愛を受けている中野実に羨望と嫉妬を抱きつつこの学会に臨んだ。「嫉妬 (envy) というのは無能な人間に相応しい競争心である (Emulation adapted to the meanest capacity)」というピアスの諧謔はまさしく僕の中野実に対する感情を的確に言い当てていたと思う。ずっとそうやって僕は中野実を斜めに見ながら追いかけてきたような気がする。いつも中野にどう評価されるかをモノサシにしながら生きてきたというのが実感だ。

そして四半世紀が過ぎて2001年春、ちょうど中野が体調不良を診察してもらう直前に同じ京都大学で会ったのが健康そうな中野を見た最後だった。それは何かの偶然だったのだろうか。この時の集まりは京都大学文書館が主催する大学アーカイブズに関する研究会であった。二十余年の年月を経てそこには中野実という日本の大学アーカイブ界において最も信頼され敬愛されている人物がいた。彼が大学アーカイブの世界で慕われ、評価されている部分に僕は到底及ぶべくもない。

中野実は50歳間近になって助教授になった。人は助教授に昇任したと言うが、僕はそうは思わない。助教授になったのだ。もとより彼のいた史料室のポストは助手と決められていて本来昇任するあてのある職ではなかった。中野＝史料室の仕事が大学にとっていかに重要であるかを大学に認めさせて助教授という職を史料室が勝ち取ったのである。だから、「昇任した」のではなく「なった」のである。中野実が助教授職を獲得したおかげで京都大学文書館は助教授ポストを確保できたし、わが九州大学大学史料室もそれまで講師ポストであったものを助教授ポストを要求して手に入れることができたのである。

九大ではたまたま『75年史』編集の時から講師ポストは頂いていたが、助教授はつけてもらえなかった。それは史料の収集整理という仕事が研究的な職であるという認知を得られていなかったことに由来する。九大で史料室を立ち上げるときに委員会の席上で理系の委員から「それは文部教官のする仕事ですか」と言われ、啞然とした覚えがある。それだけ史料を扱うという仕事に対する評価は大学の中では低かったのである。低かったと言うより理解されていなかったというほうが正しい。それを中野実は学問的実力をもって世に認めさせてくれたのである。大学アーカイブにかかわる人間にとってこれほど嬉しいことはなかった。おそらくこれから先に大学アーカイブを設立していくところでは助教授以上のポストをおくことが当たり前になってくるであろうし、それだけの研究的な質が期待されるようにもなってくる。みんな中野実のおかげなのである。その意味で中野実が学位論文を書き終えることができなかったことは僕にとっても実に悔しいことであった。

何年か前に彼が福岡に来たときに簡単な構想を見せてもらったことがある。呑みながらだったけれど、意見を交換しながら楽しく過ごした。ほんとうに研究の話をしているときが一番楽しそうな顔をしていたと今にして思う。そのまま学位論文を書くのかと思っていたら、『東京大学物語』を書くことで中断したようだ。その時も二日酔いの頭で東大の史料室に中野を訪ねたのだが、中野は『東京大学物語』の進捗状況と学位論文の構想をうれしそうに語っていた。そうして「早く学位論文を書いて新谷に追いつかないとね」と言った。彼にとって学位論文を書くことは唯一僕との正当な競争だと意識していたようだったし、そのことを楽しんでいたようにも思えた。僕は自分の勤める大学の事情で学位取得を無理にやったところもあったが、中野実はずっと純粋で豊かな動機で取り組んでいた。彼は僕にポイントをひとつ取られたかと思っていたかもしれないが、僕はその真摯な言葉にうしろめたさのほうを感じていたのである。

昨年末に中野があまりよくないという話を聞いて広島大学の羽田貴史さんと中野を見舞ったのだが、その時はずいぶんと元気でいろいろ学問的な話に花が咲いたように記憶している。この時中野が「最近、専門書を読む気力がなくてね。」とぼやくように言っていた。「ああ、こいつは根っから大学史にはまりこんでいるのだな」と思うと、その痩せた身体のいたまじさに胸が詰まった。

別れ際に「早く学位論文を書いて新谷に追いつかないとね」とまた僕に言った。この時中野は確実に半年後にはカムバックするつもりでいた。彼があげ

中野実さんのこと

照沼 康孝

た全快見込みの確率は決して高くはなかったが、彼は全快することを確信していた。そうして学位論文を書かないと僕に借金を返せないような気持ちでいたみたいにも見えたし、そんなこと以上に彼自身の人生に納得のいく標を刻みたかったのだろうと思う。だから何としても中野に学位論文を書かせてやりたかった。そうすれば大学アーカイブを作っていく後進たちにまたひとつ目標ができたはずだろうし、そのための小さな目標になれるのなら僕はそれでいいと思って病室を去った。

今、お茶大の米田俊彦さんを中心にして中野実の書いたものをまとめようとしているのだけれど、そうした過程で中野実が病床でしたためたと思われる学位論文の構想メモみたいなのが出てくると僕はとても辛くなる。ほんとうに悔しい。

僕と中野実とは政治的に「同志」だったこともないし、たぶん研究者としても基本的にちがった歩き方をしたのだと思う。そういうこともあって妙な言い方をするけれど一度として「無二の親友」であるなんてお互いに思ったことはないはずだ。しかし、お互いにいつも意識し、黙って励まし合ってきた。そして中野実を失って僕は痛感した。僕にとって中野実はかけがいのない存在だったと。

(九州大学人間環境学研究院教育学部門教授)



『東京大学百年史』編集時

中野さんが史料室の前身である東京大学百年史編集室に非常勤の室員、つまりアルバイトで来たのは1978（昭和53）年4月だったと思うが、その前年から来ていた私に、彼と初めて会ったときのことは全く記憶がない。はじめのころ、彼とどういうつきあいをしてきたのかもほとんど覚えていない。その後、現在は資料置き場になっている、安田講堂五階南側の部屋で、非常勤の室員が机を並べて史料を調べ、原稿作成の準備を進める日々が続いた。そのうちに、通史編の第一巻に続いて、第二巻以降について、専門委員の寺崎昌男先生、伊藤隆先生たちを中心に、目次案なるものが作成され、その担当が決まっていた。そして、一応原稿を書いてみようと言うことで、試験執筆という名の下に、毎月各自小項目一つがノルマとなっていたように記憶している。執筆を準備する中で、私のように歴史畑出身の人間と、中野さんのような教育畑出身者では発想、基礎知識、アプローチの仕方等々、世間から見れば比較的近そうな分野でもかなり違うものであることが、私には刺激的だった。ただ、それ以上に彼を知る人は十分御承知だと思うが、中野さんは人並みはずれて好奇心旺盛であり、知らないことを聞くことに対して物怖じせず、貪欲であった。そして、それは昼間の編集室だけではなく、すべての物事に対してそうであった。それが彼のもともとの性格なのか、それとも小学校時代の何年間かを過ごしたブラジル生活の影響なのかは定かではない。もっともブラジルでの暮らしは彼にとって決して愉快的ものではなかったようだが。

当時私たち二人、それに新谷恭明さん（現在九州大学）、季武嘉也さん（同創価大学）、清水康幸さん（同青山学院女子短大）など、非常勤の室員は大学院に籍を置く身であり、必ずしも経済的に豊かであったわけではなかった。それでも夕方編集室帰りにはよく酒を飲んだ。本郷郵便局横の、今はない飲み屋へ行くことが多かったが、ときには根津の方へ下っていくこともあり、さらに池袋西口、寺崎先生行きつけの「どん底」という店へはしごすることも少なくなかった。そうしたとき何を話したかあまり覚えていない。もちろんそれぞれの研究について話したことは話したが、それ以外では必ずしも明るそうではない将来のことなどがあった。あれから二十数年がたち、皆それぞれ一応何らかの職に就いたが、あのころは将来ポストがあるかどうか多少なりとも不安であり、中野さんや新谷さんと、今ならまだサ

ラリーマンになれるかもしれないなどと語り合ったこともあった。

そうした中で一番先に専任の職に就いたのは中野さんだった。1981（昭和56）年4月、青山学院大学文学部にポストを得た酒井豊助手の後任として、形式的には教育学部の助手で文部事務官併任といういささか奇妙なポスト、つまり百年史編集室を実際に切り盛りする職だった。実をいうと、このポストの話は最初に私の所に来た。東大の歴史を作るのだから、第一候補は出身者とし、第二候補を中野さんにするということであつたらしい。伊藤先生は、そういう理由で一応私に声をかけるが、教育史はもとより専門でもないし、あまりすすめないということであつたし、私も教育史については全く知識がなく、右も左もわからない分野でやっていく自信もないので、やはり教育史専攻の人が付くべきであろうと即座にお断りした。だが、このことはしばらく彼は知らなかった。大分たってからそれを知り、私に対してなぜ言わなかったと文句を言った。それに対して私はありのままを伝え、彼は納得したかどうかは知らないが、それについてその後話すことはなかった。

彼が助手になってしばらくしてから、アルバイトで来ていた人を一人、ある事情によりやめてもらわなくてはならなくなった。人情家とも言うべき中野さんにとって、それは辛い仕事だった。その日は一日落ち着きがなく、今日はどうしてもつきあってくれと夕方私を誘った。最後はやはり「どん底」だった。ママさんに、自分が、たとえアルバイトとはいえ、人の首を切ることになるとは思わなかった、とかなり酔って繰り返していた。

その間にも着々とそれぞれの原稿は進んでいった。いつの間にか試験執筆の試験の二字は無くなっていた。そして書き上がったそれぞれの原稿は、現在のようなパソコンはおろか、ワープロもない時代だったので、簡便な印刷に外注された。その一方で、編集室は当初より史料収集も行っていたが、我々二人は長与又郎に日記が残されていることを長与の伝記から知り、これを何とか閲覧できないかと考えた。そこで長与の女婿で、東京医科歯科大学名誉教授である方に連絡したところ、見せていただけのことに、お茶の水の医科歯科大の名誉教授室にお邪魔して現物をお借りすることができた。早速持ち帰りコピーを取って一緒に読み出したところ、戦時体制下で、外部からの圧力に苦悩する長与総長の胸中が記されており、原稿執筆にも一役かうこととなった。

その後長与日記は、編集室の『東京大学史紀要』に、大内兵衛、矢内原忠雄、河合栄治郎などの事件

の時期を中心に二人が中心となって少しずつ翻刻した。これと、既に利用が可能であった内田祥三の史料とにより、当時の東京帝大の置かれた位置、その内部事情などをかなり詳細に知ることができた。それらを読みながら二人で、大学内部の複雑な、というか権謀術数渦巻く人間関係に驚嘆し、現在でもあまり変わらないのかもしれないなどと言いつつ話した。

こうした間にも我々は時々飲んだが、最後は「どん底」へいくことが多かった。そして二人で酩酊し、山手線の最終に乗り遅れたことも何回かあり、中野さんはタクシーを拾い、私は当時池袋に住んでいた妹の家に、真夜中転がり込むこととなった。最後に彼と飲んだのも、寺崎先生を中心とするグループでだった。その日は妻が熱を出していたので早く帰るつもりだったが、彼がいるとどうしても遅くなってしまい、さすがにタクシーではなかったものの、家に戻って妻に怒られることとなった。

その後原稿執筆が終盤をむかえると、校訂という作業が待っていた。各自が書いたまま、体裁など全く統一されていない原稿を読み、通史に仕上げていく作業の第一段階のものであった。この作業はすでに第一巻分は寺崎先生、中野さん、それに編集委員長土田直鎮先生の紹介で、史料編纂所から来られていた田辺久子さんの三人でスタートしていたが、第2巻以降は寺崎先生が多忙ということで私が加わるようになった。

校訂の作業はいささか骨の折れるものだった。十数人がそれぞれの文体で書き、そしてその内容についてこちらが必ずしも熟知しているわけではない文章を、おおよそ統一したものにしていくことは容易ではなかった。「文は人なり」とも言うが、それぞれ個性的な、そして中には相当ラフな出来の文章をかなり大胆に調整していった。その中で時には再調査する必要がある場合もあり、そうしたとき中野さんは昼間の作業の後、一人で残って調べものをすることも少なくなかった。彼はいい意味で粘着気質の部分があった。また時として彼は文章に感情移入することもあった。私の書いたものでは、学徒出陣の項目であった。原文では項の最後に、「きけ、わだつみのこえ」から一人の出陣学徒の遺書を引用したのだが、彼はそれを涙無くしては読めないと言い、校訂の際にも読み合わせをしながらうっすらと涙を浮かべ、専門委員の先生たちの校訂などで最終的に削除された後も、あれは入れたかったと私に言ってくれた。

こうした私たちの基礎的な作業の後、専門委員の更なる校訂などを経て、原稿は出版を請け負った第一法規出版へと渡り、何度かの校正の後、土田先生

の標出の付加がなされた。最後に中野さんたちが長野市の印刷工場に行き、泊まり込みで校正し、なお残る原典確認を、編集室と電話を繋ぎっぱなしにして行くことを何度かした。こうした作業を通史編3巻、資料編3巻の6冊分全部、中野さんが担当した。

こうして東大百年史は完成した。

その後中野さんとの接触頻度は大分減った。それでも紀要に掲載する史料の翻刻などのほか、たまに飲んだりすることがあった。そうしたとき彼はいつも前向きだった。大学史史料室の存続問題など、中野さんを取り巻く状況は必ずしも良い時ばかりではなかった。それでも彼は自ら設定した課題について、実に熱情を込めて語り、おまえはどうなんだと私に問うた。そうして彼に鼓舞される度に、私は内心忸怩たるものを感じないではいられなかった。

私にとって、中野さんのいる大学史史料室は故郷のような存在だった。滅多に行くことはなくとも、行けばその中心に中野さんがいた。もちろん史料室は今後も存在するが、私の喪失感は大い。

(文部科学省初等中等教育局教科書調査官)



「中野実さんの昇進をお祝いする会」

中野先生の思い出

油井原 均

大学史史料室のアルバイトとして1997年4月2日の室員打ち合わせに参加したのが、実質的な中野さんとの出会いである。その数日前に履歴書を届けに来たとき、わたしは安田講堂の威容に権威的なものを感じて圧倒されていた。おそらく、打ち合わせが終わって飲みに行ったときに感じたままを中野さんに話したのだろう。「その感覚を忘れないようにしろ」と言われたのを鮮明に記憶している。

東京大学創立120周年にあたって、沿革をコンパクトにまとめた小冊子を作成するための資料整理が、さしあたっての仕事だった。おそらく中野さんは、ぎこちない敬語を使いながら周囲とあまり打ち解けず、しかしパソコン操作には嬉々としてむかうわたしのような人間を部下として扱うのは初めてだったのではないかと。何度かふるまいの「かたさ」を指摘されたこともあった。

そんななか、「こういうかたちのコミュニケーションがいちばん得意、という人が出てくるとは思わなかったよ」という中野さんのアイデアから「みんなの日記」は始まった。パソコン内に「みんなの日記」という文書ファイルを作り、室員が思い思いに日々書き込んでいく。中野さん自身もしばしば書き込んだこの日記は、わたしはもちろん、室員全員にとって格好のコミュニケーションツールになっていった。

たとえばこんなかたちで、中野さんはわたしののような室員に対しても、細やかに心を配ってくれる人だった。そんな中野さんの気遣いのおかげで史料室にもしだいに慣れ、ほんとうに楽しく仕事をさせてもらうことができた。

わたしが史料室にお世話になってから、室員中心に三回旅行にでかけている。『雪国』の舞台である越後湯沢、箱根、そして鎌倉江ノ島周辺。どれも、いまとなってはかけがえのない思い出である。あまりにも大量の酒を買い込み飲みきれず、翌日それをもってまわったこと。あやしげな「米国〇〇大学所蔵資料」であるらしい恐竜化石の展示をみたときの笑い声。箱根駅に最終列車で着き、タクシーを逃すまいと全速力で走った記憶（あれは中野さんが言い出したのだったか）。

中野さんはけっしてパソコン操作にくわしいわけではなかった。にもかかわらず、二度の海外出張に

パソコンを持参し、現地でのトラブルを自力解決してメールを毎日送ってきた。いまほどモバイル云々が一般的ではなかった時期に、である。こういうときの中野さんは好奇心旺盛であったし、多少の茶目っ気でわたしたちを驚かせ楽しませてくれた。お茶の水駅の公衆電話から史料室宛にいきなりメールを送ってきたあと、部屋に来て笑いながらどうやって送ったかを話す中野さんは、とても愉快そうにみえた。

亡くなられたあとに、中野さんが20代に書いたというさまざまな文章を読むことになった。

そこで垣間見ることのできる中野さんの姿は、わたしのような出来の悪い部下を思いやってくれる好奇心旺盛な中野さんとは違っているような気がする。そして、たとえば教育について、あるいは小中学校教師や教研集会について中野さんが書いた文章には、わたしが深く共感するものがふくまれている。

「もっと教わっておくべきだった」「もっといろいろな話ができたはずだ」という思いを、ぬぐい去ることができない。

(大学史史料室教務補佐員)

小川 智瑞恵

初めて中野先生にお会いしたのは10年ほど前のことである。当時、先生は立教学院史編纂室にお勤めで、初めてお会いした日、私がキリスト教学校のミッション・ボード資料に関心があると申し上げると立教学院のことを中心に在外資料を読む楽しさと必要性について熱く語って下さった。その後、立教学院の広くきれいな編纂室をお訪ねしたときには、快く私たちを迎えて下さり史料や目録などを見せてくださった。

その後、1997年から大学史史料室教務補佐員としてご指導を賜るようになった。史料室は学徒出陣・学徒動員の継続調査や120年小史、英文年譜を編集・発行する時期にあった。先生は大学と戦争というテーマを掲げ、大学院特別研究生に関する調査を進め、学徒動員に関しては日本のみならず英国、米国、韓国へと足を運び精力的に調査を進められた。その一環として2001年3月には立命館大学国際平和ミュージアムを訪れた。ひとつひとつの展示を時間をかけてご覧になり、アンケート用紙に記入なさっていらっしゃったお姿が今も鮮やかに壁に焼き付いている。

その間も、キリスト教系の教育機関への先生のご

研究の情熱が継続していることを強く知らされた。その一つは「学校史は広義の精神史—『関西学院百年史』に寄せて—」(『関西学院史紀要』第6号、2000年4月所収)という書評論文をお書きになっていた時である。この御論文の中で先生は「つねづね評者がキリスト教系学校の歴史に対して持つ疑問」、すなわち「母教会、ミッション・ボードの動き、状況把握、世界戦略」とキリスト教系学校創設の経緯に関する疑問に答える年史であると述べておられる。「近代日本においてキリスト教系学校が持つその存在意義を、さらに明確にし、深めることになる」視点を大切にしていってらっしゃった。

思えば、中野先生のもとで先生の晩年の数年間というこの上もなくかけがえのない時期に薫陶を賜ったことになる。本を開くと、先生の細かい字で書かれた覚え書きがあり、それをたどっているといつも先生の警咳に接しているような気持ちになる。長期出張のお留守をまもっているような気持ちにもなる。お聞きしたいことが次々とわき起こってくる。

つつじが咲き誇る季節には根津神社で待っているとお電話が史料室に入った。浅草の羽子板市に厳寒のなか行ったこともある。楽しいことが大好きだった中野先生。お料理に関してもあくなき探求心を発揮された。大学のゼミや講義のためにも心を尽くし、受講生を大切になさっていらしたことがレポート集やお写真からも偲ばれる。先生はお元気で、これからますます貴重で大きなお仕事をなさっていらっしゃると思っていた。ご負担多きお仕事をこなされ、ご研究への情熱を燃やし続け、ご家族を愛し大切になさった先生に深い敬愛の念をおぼえるものである。

(大学史史料室教務補佐員)

畑野 勇

私が先生に初めてお会いしたのは、成蹊大学の大学院在学中に旧日本海軍に関する研究を志望し、故平賀讓(東京帝国大学総長、海軍造船官)に関する史料を探索していた頃ですからもう5年以上前のことです。「東大の百年史を編集していた所に平賀讓の史料があるらしい」という話を聞いて、現在はそこが大学史史料室という名前であることも知らずにお伺いした時、ご親切に対応して下さったのが中野先生でした。私が社会科学(日本政治史)専攻でありながら、旧海軍の技術史料を全面的に活用した研究を考えていることに先生は大変関心をお持ちになったようで、平賀の文書がすべて保管してある場所に案内してもらい、「ここにある段ボール20箱以

上のほとんど全部が艦船の設計史料であるが、図面を読める人がここにいないので本格的な整理・目録づくりがまだ行われていない。あなたが整理してくださるのであればありがたい」と言われました。

その時にはそれが実現するとは全く考えていなかったのですが、その後中野先生の紹介で、平賀譲文書の史料室への寄託責任者でおられる内藤初穂氏にお会いしたときに、「畑野君は工学部の出身ということなので、あそこの図面は読めるだろう」という一言で畑野が1998年から史料室に出入りして、整理・目録づくりを行うことが（あつという間に）決まりました。あとで人から聞いたのですが、先生は平賀譲のご遺族や内藤氏に、私が適任であることを強力に推薦して下さったとの事です。もっともその推薦理由は「研究者志望に見えない程頑丈そうな学生なので、必ずやりとげてくれるでしょう。研究者としての能力はわかりませんが。」というもので、評価されていたのは元気さだけのようです。

今思い出すと、大学院入学当時の私は、何かをやってやろうという意欲だけはありましたので、この作業に大変な情熱を持って取り組んだものです。しかし何のノウハウもないまま、がさつなやり方を続けていたものですから、先生は心配になられたのでしょう、一つの方法を提案し、実現して下さいました。それは海軍研究や史料整理などの分野におけるその道のプロフェッショナルの方を多数、史料室に定期的にお招きして、畑野が整理を行って気をついたことや生じた疑問を話し合い、今後の平賀文書の扱いについて検討するという会（平賀文書研究会）を立ち上げ、またその研究会では旧海軍の技術者でいらした方をゲストにお招きしてお話をお伺いする、というような企画です。

旧海軍の軍人であり、当時の世界的な造船技術者であり、また戦時中の東京帝大総長でもあった平賀譲に関心を持つ、世代や分野の異なる人たちが一堂に会して定期的に議論を行うこの研究会を立ち上げてもらい、その会への参加を通じて見聞を深め、またその研究会メンバーの方々にたえずお教を伺いながら、2001年まで平賀譲の史料整理を終始一貫任されるという幸運にあずかったこと、そしてその史料を全面的に活用して、大学院では平賀譲を焦点に当てた博士論文を執筆し、学位を取得できたことは何よりも幸いなことでした。

中野先生には4年近く、史料の整理から閲覧の仕方の決定、目録の出版や史料室発行の紀要執筆等で相談をお願いすることがあり、先生のアドバイスには多々啓発される所がありました。ただ振り返ってみると、先生と私とで整理の仕方や論文の書き方などを話し合うときには、最初から二人の意見が一致

していたことはほとんどありませんでした。それどころか、互いに自分の主張を譲らずに突っ込んだ議論を行うのが常でした。当時は先生も私も、各自の学位論文のテーマや視角、分量などについて暗中模索の状態であったため、いつも議論はお互いの論文構想への批評にまで踏み込んで行われていたものです。先生が20歳も年下の、ご自分の指導でもない院生に史料室の仕事を任せて下さったばかりか、研究の相談に辛抱強くつきあって下さったことに私は今でも感謝にたえません、何より光栄であったのは上記のように、先生がご自身の研究を進めていく上で、年代をこえた研究仲間の一人としても私を扱われ、またそのようなことを面と向かって何度か私に言って下さったことです。

先生が2001年に入院されて以降は見舞いにゆくことはなかったのですが、今年の2月終わりに「病室に来てほしい」とご連絡があり、先生の病院にお伺いして史料室のことなどお話をいたしました。私が博士論文を学校に提出したことをお伝えして要旨を報告すると、「史料室の史料をフルに活用した研究をしてくれたのは君が初めてだ」と喜んで下さいました。そして、「大学院にいる間に論文執筆を通じて、指導の先生からどれだけ綿密に指導を受けるか、またどれだけ30代でその研究を発展できるかが、その研究者の40歳代以降の人生を大きく左右するものですよ。」というような内容のお話を1時間以上して下さい、研究者として生きてゆくために大事なことをアドバイスして下さいました。

そして3月下旬に、大学院で修了式があった後、先生の具合が大変お悪いと聞いて、学位記を持参して病院へ参上しました。もう酸素マスクをつけられて、大変な痛みにたえておられるようでしたが、私を見るとニコリされて、「よかったですね畑野さん。いや本当によかったよ、おめでとう」と握手をして下さったのが最後の会話でした。

私の研究を進める上で、ある意味では“もう一人の指導教官”でいらっしゃる先生に最後にお会いしたときに、研究の成果をお見せできる状態にあったのは本当に幸いなことでしたが、私の怠惰もあって平賀譲文書の整理と目録の作成は今年度もまだ、史料室で継続作業中です。これら史料や、先生の遺されたものをどのように受け継いで、史料室を発展させてゆけるだろうかと、一教務補佐員ながら考えている毎日です。

(大学史史料室教務補佐員)

史料室日誌抄録（平成14年4月～平成14年10月）

- 3月30日（土） 中野実室員逝去。
3月31日（日） 『東京大学史紀要』第20号及び『東京大学史史料室ニュース』第28号発行。
教務補佐員、大島宏退職。
4月15日（日） 教務補佐員、畑野勇採用。
4月19日（金） 第53回東京大学史料の保存に関する委員会開催。
5月9日（木） 史料室移転作業打ち合わせ。
5月13日（月） 史料室新規購入什器搬入。
5月21日（火） 史料室移転作業（改修後の安田講堂へ戻る）。（～23日）
6月7日（金） 第54回東京大学の保存に関する委員会（懇談会）開催。
7月16日（水） 閲覧再開。
8月30日（金） 事務補佐員、村上珠希退職。
10月1日（火） 事務補佐員、八木晴花採用。
10月14日（月） 保存委員会委員交替。
10月16日（水） 兵庫県出石町教育委員会「加藤弘之郷がえり展」へ史料貸出。
10月29日（火） 財団法人野間教育研究所『大学史編纂と大学アーカイヴズ』へ中野実論文の転載を承諾。

この間の閲覧者数

学内者7名
学外者17名

主な学外閲覧者所属機関

創価大学、京都大学、滋賀県立瀬田工業高等学校、佛教大学、埼玉県立大学、出石町教育委員会、跡見学園女子大学、中京大学、慶應義塾大学、新潟県立長岡明德高等学校、（財）横浜市埋蔵文化財センター、（財）武生郷友会

文献撮影・複写許可件数 9件
調査（照会）件数 59件

題字 森 巨元総長

東京大学史史料室ニュース 第29号

発行日：2002年11月30日（年2回発行）

編集・発行：東京大学史史料室

東京都文京区本郷7-3-1

電話：03（5841）2077（直）

印刷所：株式会社 芳文社

Archives Section of the University of Tokyo

東京都新宿区新宿3-12-4